

【台湾魅力発信】 邱義仁・台湾日本関係協会会長特別インタビュー

公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所 総務室

今般、台湾の新たな魅力発信との観点から、邱義仁・台湾日本関係協会会長から、邱義仁会長が考える台湾文化の魅力や次世代の日台交流に期待することについてお話を伺いました。

＜邱義仁・台湾日本関係協会会長略歴＞

1950年生まれ、台南市出身。陳水扁政権時代に国家安全会議秘書長、総統府秘書長、行政院副院長などを歴任。蔡英文政権発足後、台湾日本関係協会会長に就任。

（当方）日本人にとって台湾は益々近い存在になっており、台湾を訪れる日本人観光客も拡大傾向にあります。それに伴い台湾の文化に関心を持つ日本人も増えていますが、邱会長は台湾文化には如何なる特徴があると考えますか。

（邱会長）台湾文化の特徴は、多様な価値観を受け入れることが出来る社会の包容力にあると考えます。その中には、日本統治を経て台湾に残された日本の文化や習慣も含まれ、そうした日本の文化や習慣は既に多様な台湾文化の一部となっています。

先日、台湾で同性婚法案が立法院で可決されましたが、様々な議論がある中で、アジアで最初の同性婚法案が成立したのも、台湾社会において多様な価値観を受け入れる土壌があったからだと思います。また、台湾の原住民を見ても、公認されている16族の間でも文化的な差異が大きく、原住民という一言で表せないほど非常に多様な様相を有しています。

（当方）そうした台湾社会の多様性の背景には、台湾が歩んできた歴史が大きく関係するのでしょうか。

（邱会長）スペイン、オランダ、鄭成功、清朝、日本、国民党政権から今日に至るまで、台湾はその歴史において、異なる国々から持ち込まれた様々な文化や生活様式を受け入れてきました。台湾社会が持つ未知のものに対する包容力の高さは、こうした台湾の歴史と密接な関係があります。

日本人の方でも長期間台湾で生活をすれば、台湾社会の包容力や多様性について様々な観点から感じ取ることができると思いますが、数日間の旅行でも台湾社会をじっくり観察すれば、社会の多様性に触れることができると思います。例えば、台湾の町の建築物に注目するのも一つの手です。台湾の町中には後述する日本時代の建物は勿論のこと、清朝やオランダ、スペイン統治時代の建物も多く残



台北賓館（台北市）

されています。その一例としては、オランダ統治時代に建てられた「安平古堡(台南市安平区)」やスペイン統治期に建てられた「紅毛城(新北市淡水区)」などが挙げられます。また、台湾各地の地名からも当時の名残は確認できます。例えば、台湾の東北部に「三貂角」という場所があり、台湾語では「sam-tiau-kak(サムディアガ)」と発音しますが、この地名は当時台湾北部を統治したスペインが同地を「サンディアゴ」と名付けたことに由来します。

日本時代の建築物は台湾各地に数多く残っています。その代表的存在として、総統府(旧総督府)や台北賓館(旧総督公邸)が挙げられます。台北賓館は当時、一部の外壁に金箔が貼られ、夕焼け時などは太陽の光が反射されとても美しかったと聞きます。総統府は1919年に建てられ、今年100周年を迎えました。それ以外にも、台北近郊の桃園市には「桃園神社」という神社が残っていますが、この神社は台湾で最も保存状態が良い日本時代の神社であり、戦後加工された鳥居を除けば、殆ど当時のままの姿で残っています。さらに、台北の東南部に「金瓜石」という町がありますが、この町には1923年の裕仁皇太子の台湾行啓にあわせて建設された「太子賓館」という建物が残っており、現在では一般に開放されています。金瓜石は日本人観光客の間で人気が高い「九份」の隣町なので、九份と共に訪れてみるのも面白いかと思えます。

自分の故郷である台南市にも多くの日本時代の建物が残っています。有名な「林百貨」やその斜め向かいにあるギリシャ風建築の「土地銀行(旧日本勧業銀行台南支店)」や「台南地方法院」など枚挙にいとまがありません。台湾は日本時代の建物を壊すのではなく、現在まで大事に残してきました。このように、少し時間をかけて台湾を観察すると、台湾が歩んだ複雑な歴史的背景から派生する社会の多様性や包容力について感じ取ることができると思います。

(当方) 先ほど原住民についてお話がありました



紅毛城(新北市淡水区)



桃園神社(桃園市)



太子賓館(新北市金瓜石)



林百貨（台南市中西区）

が、近年台湾社会において平埔族（※台湾西部に住んでいた原住民。漢民族化が著しく、長らく独自の文化とは見なされてこなかった）の文化についても再認識の動きが見られます。

（邱会長）そうですね。近年、政府も平埔族の文化的重要性について認識するようになり、平埔族文化の継承のため積極的に施策を打ち出しています。特に、台南では平埔族（シラヤ族）文化が色濃く残っており、現在でも祭事などでは平埔族独特の文化を見ることができます。また、平埔族は漢民族との混血が進んでいるため、普段社会においてあまり意識されることはありませんが、実際には平埔族の血を引く人は少なくありません。例えば、監察委員に田秋堇さんという政治家がいますが、彼女の母親は平埔族だと聞いています。平埔族の方は漢民族に比べ、顔の堀が深いことが特徴です。

また、自分がかつて高雄で農業に従事していた際、台湾語化した平埔族の言葉を耳にすることがありました。平埔族語には「kha-khiau（カーキヤウ）」という言葉があり、これは「でたらめを言う」という意味ですが、この言葉は高雄一帯の台湾人の間で今でも使われています。こうした平埔族文化の再認識の動きも、台湾文化の多様性を語る上



シラヤ族の祭事（台南市東山区）



シラヤ族の宗教施設（台南市佳里区）

では重要な意義があると思います。

（当方）台湾のお寺や廟に行くと、戦後削り取られていた石碑や扁額上の「昭和」や「大正」といった日本の年号の記載が、最近になって修復されたケースも目にすることがあります。こうした現象は、歴史を客観的に捉えようとする台湾人の価値観の表れであるようにも感じます。

（邱会長）そうですね。これは先ほど以来お話している台湾社会が持つ多様性、包容力に関係すると思います。お寺における「昭和」という文字の修復も、先ほどお話した「太子賓館」という名称も、以前であれば社会的に受け入れられなかったと思いますが、それが時間の経過とともに、異なる価値観が次第に台湾社会の中で消化され、台湾文化の一部になっていたのだと思います。自己の文化の一部として感じられるようになれば、自然と排斥することはなくなりますが、それには一定の時間を要す

るものです。ただ、台湾の場合、消化のために要する時間が他国に比べ短いことが特徴で、20～30年でその段階を経ることができました。これが他の国であれば100年以上かかるかもしれません。

過去400年以上もの間、オランダ、スペイン、鄭成功、清朝、日本の統治を経験する中で、台湾人は意識的または無意識のうちに、自己のアイデンティティを模索し続けてきました。その数百年にも及ぶ模索の中で、徐々にですが「自分は台湾人だ」との意識が育っていったのです。歴史上、異なるアイデンティティの葛藤を経験してきた経緯から、台湾人は今でも自己のアイデンティティが揺らぎやすいですが、その一方で、多様な価値観を素早く受容できるという強みを持っています。これは多様性の少ない国において、自己のアイデンティティの揺らぎは起きづらい反面、異なる価値観に対する拒絶反応が強く、受容までに多くの時間を要するのとは逆の反応だと言えます。

（当方）多様性という点では、台湾社会では女性の社会進出も非常に進んでいますね。

（邱会長）これも前述の歴史的経緯と関係すると思います。社会の価値観が女性の社会的進出を後押ししてきました。例えば、台湾では政界で活躍する女性も非常に多いですが、これも当初法律で立法院の比例代表は男女比が半々でなければならないと定めたことが影響しています。立法院で同法が審議された際も社会的反発は低く、社会的な後押しを得て同法が成立しました。

（当方）次世代を担う日台の若者間の交流について、如何なる交流を期待しますか。

（邱会長）日台の若者間の交流は他国の交流に比べ裾野が広く、ゲーム、漫画やアニメに代表される日本の流行文化に対する台湾の若者の受容度は非



「昭和」の復元（彰化市）

常に高く、また台湾に対する日本人の好感度も高まっています。こうしたことは大変良い日台間の基礎ではありますが、それだけでは不十分だと思います。双方の若者が表面上の文化のみならず、そうした文化の背後にある意義について理解しようとする姿勢が重要だと考えます。例えば、日本人が台湾を旅行した際には、歴史的な建物を見て「綺麗だ」と言って終わりではなく、その建物の背後にある歴史的背景についても理解して欲しいです。反対に、多くの台湾人は日本の漫画やアニメに高い関心を示しますが、単に表面上の技術だけを学ぶのではなく、漫画やアニメ作家の繊細さや事前の取材や研究にかける姿勢といった技術の背後にある精神的な面についても注目して欲しいです。また、日本の畳は台湾でも人気がありますが、畳の原型は唐の時代の「蓆」にあると言われていています。それが日本に伝わった後、何故日本では畳として独自の発展を遂げたのとは反対に、当の中国では姿を消したのか、そうした文化的事象の背景に疑問を持ち、考えることが重要だと思います。単に面白いと感じるだけではなく、さらに深い理解を得ようとすれば、双方の絆はより緊密になると思います。

（編集・写真：寺山、柴原）